12
881
9

花宴

巻乃名　花ノ宴とよみて名とせるは経にも此詞ありて南殿の
桜宴せさせ給ふとあるとて奥乃二条の梅くれ花の宴
乃所にも花の花宴ハ給ふなりと明またも是なりつきて
もとの名を花宴といふるまやと覚ゆれと古来花宴
といふハ桜を観まとのみとりかへり侍るよし人見ハ禁中此
事也されと私家乃宴なれと此南殿此桜乃宴とも
て名目とせるよと心得へきや　國史云弘仁三年二月幸
神泉苑ニ覧花樹ヲ命メ文人ニ賦詩ヲ賜綿ヲ有リ差花宴之節
觴也と年源氏八十九条宮宰相中将三位也
南殿桜宴あり此巻ハ乃第一の次年乃春也源氏
十九才也　花鳥余情花宴例　嵯峨弘仁三於神泉苑有花
宴事是始也南殿花宴除村上康保二三於南殿有

花宴之時探韻例延喜七年延長四年二月等例也彼
是度々の例を兼用而此巻也花宴有舞楽之例
天暦三年三月十二日有之地下舞人まうでゝ堂上の舞も
あらざりき云々　細　源氏十九歳此春宮八宰相中将正三位
也奏云名南殿桜宴是也　別花宴也唐土にも花と云ハ
牡丹日本にてハ花と云ハ桜也桜宴花宴共南殿へうつ
らせて花宴の例結構にくはしく見えたる此物語を
彼是の例をひき合て作れるを見るべし但延長四年
の例におなじかるべし　是此詞巻の名とせる也但此詞ハ南
殿の桜此宴せさせ給ふと有

きさらぎの廿日あまり南殿の桜の宴せさせ給
一花　桐壺みかどを醍醐の帝になぞらへ奉るに付て彼延喜
に花宴有しかば延喜十七年三月六日常寧殿

花宴詩題春夜翫桜花　延長四年二月十七日清涼殿
花宴詩題桜繁春日斜　此両度の例にまかせてかう
らひの探韻作文遊のことあり延喜常寧殿の
花宴ハ宴席をハ清涼殿にさだめられしや　この物語にハ
花宴ハ南殿の桜をば清涼殿にて宴をなし清涼殿にて後
せられしとある事也　但南殿の桜を清
涼殿にて宴ハ村上天皇康保二年三月植桜樹於南殿有
花宴詠古詩誦新歌云々　此時ハ探韻なきと見えたり
かくとも南殿の桜を清涼殿の例也又醍醐の御世の後の事
なれど準拠に引用べきにや　また此外天暦四年
三月十五日仁寿殿花宴題花樹暮雲深云々　是も宴
ハ清涼殿にてある事に此物語の花宴ハ桐壺の御時の
事也きさらぎの廿日あまりとあるもかならず延長四

年二月乃宴を思ふまてにあるまゝやかゝえ侍る 花に
同殿にて此術を見合て書也 栄 南殿ハ紫宸殿也 河ニ委
后春宮乃局ハ左右にしてまうのほり給 細 后ハ藤壺
春宮ハ朱雀院也南殿の東西也春宮のハ弘徽殿うしろ
ゐしたまふにて也ハ左右に昔によりて也南殿の東西
也東宮ハ左東成へし后ハ右西なるへし
弘徽殿乃女御ハ中宮かくておはする紙 細 藤壺乃立后
をこゝろよからす思ひ給へり同庭もある紀也されともえ
見過し給はて女
をりふしことにやすからす思せと物見にはえ過し
給ひて参り給ふ日いとよくはれてそらのけしき鳥の
こゑもこゝちよけなり 河 ことにおりふしの事也 或説折節ハ
日いとよくはれて 細 此節ハ文章の宮中にさ

なとを思ひやりてみるへき也末代容儀乃称かくこれハ
作者の筆粉骨もあるへし・
みこたち上達部よりはしめてそれそれのみちみちにたんのうなる限り
てふんつくり給 花 先是一儒者奉節献題次書韻字盛中
院置庭中文臺上近侍次将先探御料韻二字置宮
蓋昇自御前階献之次王公堪勝文者並文人等各進文臺
以探一字見之奏官姓名及所探字退各案探韻各分
一字詩也忠韻字韻也故懐紙端作春日同賦某夜就
探花各分一字應製詩探得上其字如此可書之也 弄花の
ハやくにて詩を可作人とのるまゝ也 探韻とハ韻字を一字つゝ探
り給ふ作るや此作法ハ先題を儒者の定て其に古詩を
一字つゝかしてさくるも詩乃名句ハ時におひる
句を用也左らして儒者乃文臺のうへよみあつるを中少

ねちをたつねて上よりはしめて韻字を二つ丸てなる敷
盛にけちんを一字つゝ書て人々さの故実也　一韻二韻ある
をとめおりまして詩を案し給也　諸官ハ各一字を
探韻也　作文十人なとハ五言の詩二句を一字つゝ韻に
わけり也　十四人の時ハ七言の二句を用也　花鳥よくらし
細　まとめのハ也　文字にさくつきりるへこれらの也さかんなん
と其韻字を一字はくさくるとて詩作也　花鳥
すりなくるを

宰相中将春といふ文字給はれりとの給ふ声さへ例の
人にことなり　　花　花宴の詩は春也云韻の字になし
何ひあるまし也　源氏の君の宋花乃春をこゝにもて
や韻字を探給ハ各こそ也とや也　官姓名何の字
を給りぬとなのるや　となる花宴は春字を探給ふ

る自然のるなりさてはうひ容儀心つかひしてさへき事
とかくれそらう　弘　声はうひ退るさまよ人はうひをも
ありけるや

はさに頭中将の人のめつらしきをさてもおほゆへめま
といとめやすくもてしめてさてはうひるをとのく
しくもくれなるを　細　これもさのこおとり給さるゆゑ也
なくれへくを　細　源頭中将のかれ人とといふなり
みなおくしるらにきれものめるおほえるを　花　たくハ臆病
の人のたくしうるる時ハよそへめいくるまいしてる
必臆れよりさ縁くもさみゆるなり　細　臆しゆる人とみゆ
地下の文人たさましかも見てとさ宮の時　たとしりらくもて
なく袖くなくしまれ　　河　呉音よ讀なるへし堂名同也
なく数寄なにやむことなきへおほく柳し給ふさへなるなかにくる

うたてあるくせくまてあるも花庭にてもちいつるかとも
しられくて　宋　貴人たち各才学をぐれあるはとや
やまとかなかるれともろしきなり　細　詩の絶句一首作る人
さるすいともやすかるなれハ時宜によりあるひくるも
年老するもの心にまかせのありあやしく座つれて出いな
被るともあらればさは無くけらんとしるたりある
細　まのゝかれさる功者ハさるもハ作もともいはるゝ也作るす
みとも稽古だとはげむべきなり也　并　功者のなれて勝を
ぬようしたる也　細同宋　儒者老するうちハやつれさま也を
とらの功者とてかと勝をとるもろくせしよりて探韻
をとうとさる代はめ絶対はおくしたとありとも云く
先人はあらまて此人く儒釈道を宗として稽古をつき
あるよしいへるべし

楽をとハ作らに出のそのへさを行つきやうくつと曰
まてるかと　花宴に遊楽さらさりかく舞楽ハなす
後天暦三年三月十一日二条院花宴　陽成院　同月十二日内
裏仁寿殿花宴　各有舞楽　即奏春鶯囀　又地下伶
人をもらきに殿上の舞ハあさきや此物諸ハおこし面
新をおれてうちもるくさもあとく出なし也　細　延長
四年此作を用てうかとるや又しられ出此度ハ楽あり
されとよく成とるとらへありける也
其内常にはるやみりとひとつきなくてあるた
細　天暦の代なるへし　春鶯囀花宴によりあると一名ハ
天長宝寿楽とう此くらとある物也　宋　ハ作つ
作楽花は代によお遊せりかくきさるへくさんじる也
舞けりる也

源氏の院ハ紅葉の賀の折おぼし出られて 細 紅葉の賀の事
さくふ月なしたり
春宮かざし給はせてせちにせめ給はするにのがれがたく
てたちて 細 春宮ハ朱雀院也源氏の舞ハ立ながら少し舞給也
此舞ハ前の舞とも見えたり青海波の舞を舞給ふ
宗 源氏紅葉の賀ハ青海波を舞し也今ハ立てハ花を折て舞
ふる事也 源氏ハ舞を清而吉也則花をかざし給也 河 [illegible]舞袖也
のどかに袖かへす所をとおもしと有也
けしきばかりまひ給へるにゝるべき物なく見ゆ
弄 源氏君ハいつもの舞とも見えさりし
左のおとゞうらめしさも忘れて涙落し給ふ 細 葵上
の父なれはさやう成心をとゝもうらみ給
や 宗 源と葵への中十分にすきまちてうらめしかり

まじき今日の舞ハ長なる也
頭中将いづらおそしとあれば柳花苑といふ舞を
河 或說云此舞ハ婆羅門僧正将来女形也其ハ姿如
吉祥天女舞様柔ク静ニ而已也 賜御衣延喜延
長例也 細 此舞今ハ断絶 弄同
これハ今少しすぐしてゐ 花 頭中将ハ心さく〳〵入し
㒵舞給ふ也 細 源よりとハ格ハよろしの舞所也
かゝる事もやと心づかひやしけんいとおもしろければ
細 かやうの時ハ不意に舞る事もあらむと兼て心得し稽古として用
意もありつるにやと也 宗 頭中将へ心つかひや有ん面白とも也
御衣給はりて 細 花宴ニ可然 宗 花宴ニ舞楽のすへし
例ハあれとも是ハ殿下の給人也此ハ堂上の舞人へ下た
勅禄と思ふへしめづらしき事と思へり

いとめつらしきことに人おもへり上達部みなかそへられてまいり給

あそひはつるまてハ　花　此宴乃日度上代華人親様を給

ふかゝるを珍しき儀也　弄　花宴華楽まし例なきあ

達とも堂上華人の儀ハなす紀伝人はめつらしきさかへり

あらたにあらためもちいられし　河　結同（ケチス）或揭月（ケチメ）　宗　上達部公卿

給てと称乃なすれたいつれとよるをまはしたるもをもみしけ延

文するとうちまうる程も　花　詩と被講（ヒカウ）せる時ハ意を庭中（テイチウ）にした

てらる文臺（フミタイ）とうちらく源前よりすゝて文人とゝもハ階

下はなくまゝて講頌（カウショウ）するなり

源氏乃君の詩をとりわきしるをえやうれ句ことにそんし

のゝしりたるをとも此句をもいかゝしらぬへり　河　詩講と

ハ此文人さとかやくして詩をよへもいゝる常此るなり

ことせいはいかく廣才（クワウサイ）の人難字（ナンジ）をよはるたよりてたくらし

ともいゝやしけるなり　令案公事不甘心（スカンシンセク）公宴（エン）の講師（カウシ）

とはとむる源といふ人難字を不講得（サランヤカウシエ）平只秀逸（シウイツ）するを

毎句（ミツク）読やうに誦しのゝしるをいふなり

細　とんとハ詩をハやいふなくたとにやハ毎句秀逸なる故

也　宗　源氏の君乃をたをいかんと賞翫よりて此の字

と出入也講師もえよみやらす詩を詠揚するによりて

毎句をしのゝしるなり　文言感激（カンケイ）故なり

よみやられねつもみなもまたこの君をひとりごとにし給へれハみかと

もいかてかれるにおほさまん　細　春宮地也相当帝（ミカト）ハ給す

をも源氏の君をとえうし給也　宗　青字あるへくれ

源氏をとえうし給とならして詩つきをおろかにおほし給

さぬかなり

中宮御めのとまるにつけて　細　中宮ハ藤壺也　春宮乃女

御かやうのことにひきすぐれ給へるをみるにつけてこそ給ふとも
春宮の女御のあながちにくみ給ふらんもあやしう
宗　朱雀院の御母こきでん也
我かくおもふも心うしとぞみづからおぼしかへされける
細　又かく我おぼしめしゝもあやしけれとも　宗　女御のそねみ
給ふを藤壺の源氏にはじめてとゞめて見給ふといとしくおぼして
あるまじかれとおぼしめしくだしとも也　河　霞（かへさ）
大かたに花の姿をみましかば露も心のおかれましやは
河古　藤壺のはなれぬ心を花によそへ給ひて風吹とに物思ふけく
弄　源氏のもとつくしきをもくれ給ふによそへていふのにようちて
はかなくのたまふを源へ給ふ也大かたにも露もましかばこ源のうへと
さ御くさくるをもみつまりし也露もをかしぬんと花によそへた
そめてのこゝろのことし　細　藤壺の御哥やいみじうるる哥なり

古き哥ならぬ心は花にしあるにくきともちらるとも
志らるゝもとを見ゆくに人をと思ふしとく花のうへにまんなとを
見ゆへにもちなる物と見あるとも也　此哥かくへる所あり
今源氏の姿は給へるになりて心よりも給ひしとや大かた
たゞまじくは源のうへとはかくなりてもまなきとや
孟　中宮おぼしぬんと花によそへひ給ひしゆゑ也又うつらへんとを
きはおもし給ひつれどもんとふく源氏也花ぬんは我かふくかう
むき遊びにまさと給のあるやうに弘徽殿なとのみくさ給
をさんなうやや
はんのうちあつまんるかくてもるとにさん　細　かやうれはなのさん
まかりつれへきるにおもぬはぬるあかくあるへきおもふとも也
古今に比也　弄同　孟　夫の哥の式ア細也
衣つくしうかるまで事をてきるに上東戸　宗　花宴のそれゆゑ也

とのくはうれ后宮くしてせ給ぬれはやうく成ぬめり
河 御遊也又云頌 弄 御遊也
月いとあかうさし出てをかしきを源氏の君ゑひ心ちに見す
くしかたくおほしけれは上の人々もうちやすみてかやう
にておもひかけぬほとにもしさりぬへきひまもやあると藤
壺わたりをわりなうしのひてうかゝひありけと
弄 二月廿日のほとをいふ也
かたらふへき戸くちもさしてけれはうちなけきて
花 藤壺のけんしきする女房王命婦なとのこと也
細 王命婦か局をも訪へし
なほあらしに 河 万葉 遊士不相とうそ也 細 中くとおもふ也
弄 これはうはからしや也 花 なをあらしにとおもひつゝくる也
いふことをさしてあらしくてもなからあるさき

弘徽殿のほそとのにたちよりたまへれは 河 万葉集云
大殿南細殿秘説云ほそ殿ハ廊也 細 桐壺はならむ
一 ひめほそ殿ハ廊也 弄 東よりなる廊をいふ也
三のくちあきたりけると前三の間にあたる戸也格子遣戸也ことなる
戸ありこれよりあたる前三の間にあたる戸也格子遣戸也
花 三の字ハ大かたよみくへしおなしてんのほそとのに戸ニあると
前三のあらたにあたる戸と云也河海にいへるおもむきなし
弁 弘徽殿の東よりなる廊ありそれを細殿といふ南より
とをり廊あり南奥の前三の口也 一の間ほそ殿へ
出る所よ戸三あり南前三よりふるをとのくる戸也
三の口のり一台弘徽殿の東よりなる廊ありそれを細
ほ殿といふほそ殿へ出る所よ戸三あり南前三よりなる
戸なるをとさしてある戸也三をさきよりよむへし連歌る

とハ三の戸口也といへり 此理ハさもあらぬ也と案小の廊登
花宴へに出る廊ハ東三乃口也 宋 廊のかうらん南乃宮
に戸三ありそれ三番め也南の端(ハシ)乃戸あきたるや也
女御ハ弘徽殿の上の御局にまうのほり給ひしと
もとの細殿ハひまありけれハ戸もあきたる也とも
とせん 宋 花宴ニて別当れてんハ法との御たいまうり給ひ遊
やうにして世中 此おやもあちハもくそうしてもくらをとる
のかりてのそれ給ふ人をみな給ふるへしいとまうりおし
をとる了忍のあるへくれんとハ中たとぬ 弄 世にあやまちを
御事ちとして給也されとも源氏乃と叔のあやまち
ハさりしあらし候へし 細 思ふかよわちりるまたる也
世間の人乃あやまちを忍ふなる人へし
朧ろ月夜にふう純そちきれとうちとして

河
照(テル)もせすくもりもはてぬ春の夜の朧月夜にしく物そなき
大江(オホエ)千里
とうちすんしてこなたさまにくるものかと袖をとらへ給へハ女
おそろしと思へる気色にてあなむくつけ是ハたそとの給へと
也何かうとましきとて 弄 哭(イホ)をはいひの字にすくしやまとうた
御覧ハいひうたひの詞にハ清し読 一説 細 ひのれの字清て読
なりされとうたひの名の字をかけてうたふ也 比朧月夜奥ニ
とかなしといへり
あかぬ程の夜をと思へる月れる詞をかすかし思
細
かやうに思ふさまのおほろ月をさかしぬ心をハ心に見さかしと也
弄
源氏朧月夜にちかきを引かしてハ惜月夜をさかしぬ心ハ
也 宋 源氏の事也 朧(オホロ)月夜と呼(ギン)し給ハ中の宮の名とし
まるとも言かれこそ入る月のさかもみゆるハふかき心也

契とも同前也又源氏の詞とも女の詞ともゆへにわひ給
へんたうとかしねらうさをもやかてちるへし
やてやとかりしに打ちしてもかくして物いひてつけさまし
ことにはされたるものまてとなつかしけれはおもへるにわかりなく
なく　宗　三乃戸口へまうてきたるにかなき也
らうにんかての給へと　宗　人とよひ給女の返事也
まろはみな人にゆるされたれは　弄　源氏自讃(ジサン)の詞にはあらね
おそれ給ふしと女にいひむつ事なし了簡(レウケン)ある詞也
細　源の自讃(ジサン)ふとまかけむことにゆるされたるなかを八計略(ケイリヤク)よの給
也人はまたしもしられめ也
めしよせたるとはこえしおほえて事のわけてみえ給てはへる
との給へかしとのたまふはまさにけふとさためて心さしかう
あつまのありけれ　細　源氏もあへ見えまたいひ給へと

よとや　宗　思てこそのちの給ふく源氏也八女乃上の給
てかやうにいる給とも
まひしをおきへなるものゝかほをきもちにしうへかへりし
も思へりさわきてのやうはへさりけるまゝにゆかさむはそれくち
たしきに女とおもひつゝそのやまてはしたなくもとうらね
ちきへし　細　女の返事也
猶きのきえてもみ給ふのつりとあすくあけゆきて
河　労亮(ラウタケ)　日本紀
こゝろあれともくし女ことわりてはうらくに思ひたまひれたるを
しきちかり　河　周章(アハタヽシ)　又嬢
なま心にかつつし給へ　細　源乃詞也
いてうちさつてもやとあんや八はうとも捨はさしとの
給へと　細　向後(キヤウコウ)給ひしてや過(カヨフ)つかさ也　宗　思う人なとも

てハ後をもなれハと思ふるへにふくせんかたなやとて
も此まくみえ侍りぬれハとや朧月夜なとに源氏
ハ源氏へかけ給へり一段の好色の人とみるを
うれ方世にやりてきこしめしても菅原のとハとりとや守
弁 こさえるも菅原まても給へきにおれり
し給へともあるなのしもとハ給ひまし給ふやとこち
かるなの也 細 朧月夜の事也まし給ふまくみえれく
ちかりなる菅原まても給へきまるなるに名のりせ
もとハ誹とたしめやそてとりてゆるへこまやとも
ちかゐる事也 玩 名のゆきせんハかくとこむとハ給さこ
紀也縦之きやともも菅原まても給ひてこそや
よき給へる也
せつふ後もえんよかまめれきよるとたとまちやかくしたりく

きよるとしりれとて 河 水原抄云此事甚不叶其意 但
とうくひまうれちれはとハかたもあくさたらへつると
此哥にたちのかきめりしきにまさて給ひかり
とらつるもこと源氏給名のましらへりてうかなへきと
いさられきよる夜にそに女君うれ方世ふやうてきこえなか
せにへるなき心は しあくもなのしはとも給ひてもと
きよへきたかのしきてハはくハ此かうふみく菅原とも
給ひせ給ふるもよりて源氏給ふよおおれくさとこうや
ゆのこきよへつるとも志給ふみとていつれるせ一家なやとるとも
をとわりむまにとよめるも此哥のきいはまうせ給ひはも
おほゆかなるへしせちんしるるも志られとてハはらる
とりふ紀也 花 きこしまさへてるせハ羽ハ源氏乃ご給
ん也きれ女の御文きよりへてひとへよなのしもをハらうまし

こゝに至りて京極殿とハかはりしやとよみ給へる也源
氏の心をしらしめんとて人にすゝめ給ふことはふ
思ひわすれ給ふとおほしめせとも御心にかゝりてさる
うきみの上をおもひつゝけ給ふにしのひかねてなくなく
のり給へとはいへるなり心かはれとはかはられたる
さまをいひて下此京極の色紙に小篠(コサ)の原の風となくて
おもきをハ京のやとりとおもひてとちはなれて
りし人のおもひをも京極ハ下の詞也此ほとのさる
二条家おもふのやしろとハいふ也此のとゝ小さかの原
乃風ともそとはかなく河海の説にいひあけなし源氏
京極ハ一向(イツカウ)なくこと清きに此物語ハやうれ詞とこく
くはしく色にあり也 弄 源の御心をいひあらはし
とまりと中宮へ行する也とは京極とて源氏の心を

心かはりといひしをも行也京へ終るまてめて 細 源の詞也
是ハ京とかはりて心かはれとハ京の也とも也きたさかなくあ
はるとも也河海説花鳥余情に京極くのなりとて
いへる 弄 京かれとてハまろくれいかれかなく侍るやうなるを
下の句にの京極 孟 源の詞也京ハ坊に移ましきを
ておもひきれとも京極をおもひましてせたる色紙
ときれかれたるは行まてとも分る也とのふすちをうつ
えさせ給ふ事るさ也中宮このふるまひをいふ也
行幸のさま京極やとるを紙わたりむまにこ清らか京に風ともなくて
 箋 此人々弘徽殿の大臣を人々れたる太政大臣と源氏のきよう
らぬ中なれハ京極んまてて清らかなる事をいへるさま
にて京の行へといひかれ心さしの深きさまあはれに
とちんしめる也清く心ハ風をも京へになさうして京と

とゆゝしぬ物なれハうそつくしよめりこさゝハ小篠也
細 びんなきことなれハと見えてなれハ君まつきそへされハ
うしさことをおもへきも家の事を行ぬよてとひきとゞめつき
みそくハおなれとちかへるも行にも給よとも也これにかう
京ハ小篠か家也河海をとさいでつる紀行にさし気源と
大殿度津中に風をもあしく家をうらにまかしぬと
おそるるにも也 孑 源藤のは風もことに行さうしく津也
ゑとゆくしぬ物なれハ家の物をそとゝまとめさせ給ハん
さるをとよろこへよめるも二条の殿をくのことゞもかへろ
りろんさるをとこはうの京の風よそをとうへるへし 経兄二
花 孑 源氏の氏寺也行くハ風をもしき物なれハ家
のやとりをこゑうしなりんとの心也兄弟をおもへこおりし
まもとハ小路也とたまてハ坂をもろしとりしとも附 空

はゝくハ家をよめるをかきし紀おもひとなれをとゝへ小なる也
まつりくわ物はとをなるとハちらむ津くまん 孑 家の
心也 細 それこのまつりにを物はしめさぬるなり
なとも也 孑 源氏の祠也太大臣の所なるとをいなへし
まもとうハ経か中をも心ひはんにんく物紀さなき
孑 女のおや紙を家のしそなへ所んとて源の心をとゝうし
行のとハ小なる也
うちの法は行まの表うちをりきしきことをあしくまゝへ
ゑいとまさるまくこ也 細 弘徽殿也 孑 おほ見てんの家の経
法 遊ま人の家なるさ度也
あふさくるをとさるしりこるをゑよく出経 花 和泉式部
假名記かゑる人の扇をとるもつくひとつまをる又東坡詩云
攜扇唯逢春夢婆と能まるをきし春夢婆ハ女の異名

也磨ヲ去ふさを史姫の絲とおほえたりしハ扇とさとりたまふ
事なりとあるなり　弄　唐土にも史婦の婁に扇とといふと
ありいふ合歓扇なとも云かありあふ方なるをもつへら
細　あまたとりちらしゝて源の出給ふなり
さるものゝみえ人くおほくたちそひて　細　明日の花宴
の後朝なれはさしくおほゆるなり　桂宗中將くく源氏の御
出座不也
おとろかさるゝもほのれぬ　細　漸(ヤウヤク)稀覚しきことなり
つきぬとさもえることを紀法思ひあつきられと
栄　花宴に緋白(ヒメモウ)衣打とるひ給ふくてひまゆりて源文(ゲンカウ)
りはくるもかやうにありきぬらるとなり
猿さしるひつきて稀をそしかつる入給ておしの給へんと稀つく　絹ふし
出入たまひつる人の御ありさまとられし女御の法おとゝとたち

みこそハおもしめ　栄　稀覚しきなる人へくもなかりつきいふ也
河　寥(レウロウ)　水原
まうさせ給ふまれぬハ五六の君なるんなし。　栄　源氏と知給
ひ給へハ世ふ給ふる事もなし人と覚えさせ給ふ事を　細　大臣の息女
みくハるか。(此二字いらく)五六の君なる也不審(フシン)しき也せんするまぬ
といまうさえんにはらぬらかさといふ
そちの宮の北の方　細　気色ありて更の心ゝなるなる人へし
栄　北の方ハ大臣の息女也
此中ゆのをさめぬ也此君なることとをそうみきこえしう
河　不旨(スサメス)　日本紀
山さるとも人もとをさめぬ橘花いくなをひそへみつやさん
大あらされ枝の下草相ひぬれハ駒もをさめほる人なし
これらハみなあひせたる心やされハさそさむとハ物もを

題義也よすさひたるといふ心也　細　篇帝の御心さへ
のおほえハいとゝうつくしきうちをとゝハ此男君を祝
思して也ときこゆへし也　弄　中将ハ太政大臣の聟也
中くそれをもましくハさてもとこそ思しまし
弄　と夜の女も源氏の心によひされとも中くとハ世にあれぬ
よりれんさ　花　すさめぬと云詞につきて思ふることいく
経可為也　弄　帰宮と弘中納言の御事ハ生て弄
行人ハ世にふされぬと夜の人よるとハ中くまよふまちち
いまはしかりと源氏云給はん也中くにかとつきてかへりて
宮右大臣春宮にまいり給はんとさましく行へる我いとおしき
けるをいつれともいひえさりけんほともまよはれしり
花　朧月夜ハ例ならぬ君也　細　此人也　弄　是ハ朱雀院へまいり
可行かむとあれハ源氏の為にも行かんまゝしそ

の人なりハ右大臣の御方よりの給ハんするといへと打しの也
心つくしはいかゝしを為んほとも志うとこゝろもとなき
宮給ひてハまさなからんさまのしるへる事や
ゆかしきをなんと思ひたぬれハ花あかる我ハあされハ
細　女の心なとや
ことかよひ給ふさまはをさしへとをあけぬらんもとよろ河
まうさし心のとかに思ふるへしうたやうあるに清まかても
河　詞つゝけなり也
まいりのあけゆけれはいたき夜のやてるきりうりしまうりたるを
やとあるとゝふさひにくへうま給ふ　河　葵上此時ひうち給也
花　河とハ葵上の事也是とし給れと葵上ハ室家の事
あれともいかに思ほえ給御葵の事をいふなりやそれも給
みつねとま中にも打へまうきたる心もまいみ申へき也

弁 左大臣はあらしと葵の上のことに成給ふへきかゝる事也
源氏の君は先亜（センアク）をはなれかへりみ給はぬかたにつけてもかへる
本意ならぬ事とおほさるゝ也但本意に本意の深き御心をと思
給ふらんも葵の上可然とさは花鳥のいはれなる
らんも可然左大臣のは兵部卿（ヒヤウブ） 細 河海 葵の上あるなる
当世女のかたくしきさまのるなとをかしく思ひ給ふへ
る也花ある中宮の御ありさまに本意の深きにいはまし
あり給ふ葵上通のる中にいるらうさき 孫 葵上
の御かくあるに深きと云給也但花鳥の本意の
事也あり心て 宋 葵上のるといふ流きこえ但本意の
かゝりかたる可然花を見てそかれやうに物おさく
いふしをやましくさぬ物と思ひて給源氏の御心也
それ日ハ後宴の事あるに思ひいそかれて給ふ御心也

と清くまいり給ふ 花 後宴（ゴエン）とは三月目（ミヤウモク）八日ノ賭弓（ノリユミ）の後
二三月に弓の結（ケチ）あり後の事をいふへきを花宴の後に宴をとる
なし給ふ也 弁 ものかたりのうちの花宴の後宴とは花宴ノ成
給ふ也 細 後朝の御遊（ギヨユウ）也 宋 弓の事あるへからず弓の勝負（セウブ）
の事をいふそれと花宴の翌日のことにあらすして後
宴といふへきなるへし
翌日のあそひを後宴といふといふ 細 翌日ハ外
様（ザマ）なり内にハ後宴面白也
夜つかへあそひたまふの外に給ふ事なり 細 上局（ウヘツボネ）へまいり
給ふ也 孫 御後宴ゆへに暁（アカツキ）に清涼殿（セイリヤウデン）より参給也
宋 後宴ありて清との前に参り給ふ也
うちの殿にいそやしぬらん心をさえかねてのひてゆかぬく
又なかよくさすか猶花宴をつきてそうくいと給ふるいは

ゑひ心ちにや見えん 花 おほろ月よの君也 此君と見
そめしよりなにとなく月に縁(エン)ある詞也
細 物なれたる大臣の女子とは思はれぬ也いつれならんと思ふ也 源也
おもふ人ならんとて源の事を見給也 弄 源の御あらましなり
御前に惟光朝臣なとつけて見給ふ也 細 源乃退(タイシユツ)出ヨリ夜明(アケ)ぬ
て惟光良清(コレキヨ)なとの詞也
たゝいま北のちんより 花 中宮は北の陣(ヂン)ハ玄輝門(ゲンキモン)乃方也
かねてよりかくれ立て侍つる車とも罷出る所さ
くの里人侍つる中に 弄 小陣あ人みえて見るに心も
しきてんのうちの人くは陣をまぬかれしと詞也
四位少将右中弁なといそき出て送りし給へるや
細 朧月夜の見送也
弘徽殿の御あかれならんと見給へつるけしうハあらぬを

ちひさきとまるへくて車ともおほかるを見ゆるにと思ふ
ちつきれ給ふ 花 御あかれは内より退出(タイシユツ)し給ふかたつかた
作 こきてんの御流也むかるゝ 弄 こきてんの一数乃大臣
を退(タイ)出し給ふを御あかれとは云也
ゆゝしくいみしられと思へん 細 五六君とさたまれと定(サダ)めかたし也
ちくおもしろきを思ふくはしくもてはやさんをいかに
そや 細 文おもしろの心得てあらまほしくいまいましさをいかにせん也
細 源氏と聟ならんとは右大臣の入内(ニウチヤウ)せさせ給はんとの心也 在春
宮まいり兼約(ケンヤク)ありて可有(アルヘキ)遂(サタイ)にや
まくさんのおりも猶よく見ん程ゝ心ちえくちをしかるへし
さりとてしらてあらんはいと口をしかるへしかれたかにせ
まし世のゆかりにてはいくたひもまかりつゝ給へり
ゆかり清をつくしあらん 細 宗上のこと也上のことをたにつく

はくとあるゆへにあはれならず姫君乃名をとお
もひ出し給ふなるべし　弄同
目なれたれとゆへなつかしうもてならしたり
宗　目なれの事て云ことかたるへけれとゆへ
なめらかしてあつさま桜かさねにまかりあせんくにて手ならいの
月とかくかきにうつしたる心ばへ　河　清少納言枕
草子あかつきめくりしさ物三へかさねの扇又へらのはあ
またあはくて云　桧扇のあかきいろ三枚つゝとうん
やうあらはにしてて京のみつくとみちてまろかはちく
ひかりすひまをひ出しれなるや　三重扇同風情也
花　まねひて玉髪八五寸比扇と云るをたるやうなり
とかひらしく桜の薦檀をまて白くうちまてさくなこ
きくならめる月をうれたる人ある紙の色と云ては

と出しけるかや　弄　桧扇のあかく三枚つゝとはくむ
やうく三枚かさねてつむまや三枚を引よつくむ也　一説
あかくさやハ紫みつくるくとみるまたかゝかと也
細　桧扇也摺に月をかきて紫のかさね紙云さるへし　宗聯説
みえ泥なとも又かくゝと也
めてたれをれとゆへなつかしうまてもなししかり　弄　常の物
なれとゆへあるつくりまつるしるやも人の心ばへ
見ゆへきさゑ也　弄宗同
なれならとそ申せしはるの心よふうる紛へき
細　さ比乃亭也
世にたくひなく聞えし宝ひ物の月のゆく云はなれにまかく
花　吉水僧正亭の月のゆく様をとめてそ亭
と出ゝるとありけるとてよそにうつる也　源氏とと

泪とも見えてよむへきさまなり　源氏の君はかなさむ事
よろこひ合乃事やとなり又花宴の時ハ詩をつくり
艶なる事とも申給へり　細　源氏の作ハ色を秀逸也又
字殊更好也と花なるまさなくあり御前面白し
源氏扇まさくり給ふ也　宗　源氏の詩の明なとを思ひて云
見ゆるも恋の哀にてかくへとも月かけにも心ちよる也
扇ま手にまさくりつる事也
世うきつまに給ふとも見給ふ心地にその子をも又ひしらるかに
当る也物語せし也　細　何ぞその人の上也
いかなる恋を心みるしられてもしらんとも物語して二条院へ
わかしぬ人るまじいつとかり見ゆる思ひありて何事
やうはきらくしきさんまへいつとこの也　何君　細　何と也
何ぬところなる家法の方にとしへなさんと物語せし

うちひねりし　何ならむとおもふ　細　右近とも見えし也
心とその法を見へられしとも人なれ程見るにしもやまひらん
此之も見つるをめさられ日ころの法輪經くとなると
花くちして出給ふ所　細　花をも物也千手法文のまうにたれし
なさんともろことも給ふまてもやうなるへおもとをうしとある
あまりさく人なれさるやうにまやうなくへきとも也
宗　先ハ法式ある心をも此心見えとも也女房此中よくよく生き
乃やうかたまちまちしてき見
ませハの所にくちわれしう物語をせし海ハいつとよりあかしきされて
とるとるまてハ此ろうひまの心にも法ハ物語の度ふかき世への事を
宗よいめんし給ふ法　細　此よく源とも志てうひ殊に家乃者を
見ゆ見ゆしもさせ　宗　源氏葵上へは前也
此世くせよるつ物語しめるくるされて　宗　源氏の法心也

ゆられは琴ひきさしたまふく　孟　源氏の引給也
やりうくにぬる恕しはてゝいとうつくしうひきたまふ
ぬこさりそれさへのやうにかよひたるにぬる秋は尓
ものおやさく房はこ波一力之天安波之元加左良波
也波左乃保曽呂久世利可加尓加良久左良可波之千加保
の保曽呂久世利可戸左之波左文天之天之波毛止利左文天
慕也多加良波左　借高麗楽　盤渉律　花　盤渉乃調也瀬之比々之尓
八道をとりて后はおもしろき物なれはやうにぬる秋はまた
ちてめてたく葵上のもとさとへてうとひ給也下此
詞よりよくやうるとのゝ心にかよはしをたるとやはらふつ
ま心盤渉乃曲にある紙忠にかきて出さるへし
弄　盤渉借高麗楽乃花の宴によりて葵上をうちとけぬ心のうち
可愛き　細　葵上乃心をとこまかにあるをとゝ思ひなしも花なる
よれやさしく琴はうちあるもひきて又ひあると云々
さかりくいはあるまし　花　源氏をしへ給也
ねとくわらひ給て一日の東宮より給らけ程はとはしうて
ちひめく　細　花宴のこと也　孟　花宴のことを大臣の筵
めいはらわれは此代四代とうたんか様ぬれとこのさひのやうに
河　此花宴は代四代の王或云周文武成康模之かは所かへりて弘安除
氏論儀にも貞信公の西親あるなと云々親行説同之
桐壺帝を延喜に准せし陽成光孝宇多醍醐の五代
さて光貞信公元慶四年延生なれは延長までにそ
四代也于時太政大臣也忠平摸擬せられたるにてあるへし又彼公は延
長八年九月廿二日朱雀院受禅日歟関白詔あり此
天暦漢漂堂に桜の宴あり号するに延喜の代の御猶
后ちうちもなく此実白号清慎公仁和の此の西親也

とかく不審也 弄 きく人数代のほくへたる也とかく心也
細 河海にみえたる紀氏物語のこと云々 年久しき
ましにかん侍へし代の数よみてくはへられしとこそ
事ともさやうにやくにもあらぬ物の名なとくのみてそ
よませられるなとあれ侍りけるなる
字をも形跡と尺せり人の行跡見えたるとかや 花 令見文の還跡の二
これ詞のさやうにくもし文芸の携たる心にかへるにや文
遠跡八ともやるやうにふるきとも用たり推察と云詞に遠
跡とも也それも人の行跡と見えぬへしの僕不各と
あるゆゑなれは心を遠もる也又さらん紀へ詞也此
ありと居りてみる人には也 弄 ほめたる詞也 或へ
いにしへ詞にもふしと云 細 詩ともほめたる物なやうき
文は字のみ景跡也 私勘 日本紀天武紀下云景跡行儀
景迹をとも心をもよめるを経文詩の人をもえて用

と云なりて人しへ人さ海をほめたる所にもあまくならず
なりそれとひとをもわり可然へとかや 孟 ほめたる
詞也 弄 遠跡ほめたる詞也又あしくもある心也又さしも
くまる心也 河海同
みちくれ物の上にかきとおほえる所ほひ 細 源のよくま
あそびてはくし行ゆへと也
かしうまかめしそくの人をも行へる也 弄 源のくめしくの人行へると也
おされとほとく筆ぬめ人を心もちゐへしほしと心もと行へし
河 殆 花 政中物なとまひつきそ文ともも筆をも心の匠
とや行なるまる人ともあるま 細 別勘 孟 行一儀あり
あとにそくの人物となりたるも侍しもそ 孟 源氏の詞也さや
うたそくの人物ともなるをもおろし也畢下此詞也
細 源の詞也さかと見えたる也

たゞおほやけことにそくしうなる物の師ともなとちうくえにくて
てもてなせり　河　翁さびといふは上にもおほくねともあはれや老わ
さまことなる人は見ゆくまりしたるとやうれしき翁也　細　そうし
は翁乃字なるべし公すれは翁なるとみえ出仕へもなくて
隠遁居るもの中に物の上手なるとあるをえらびて出し
侍るなるべし　弄同　花　諸道の名也翁人なくてもあるむと云こ
ところなる名也けしてとなる人也
よろづの事ならひなし柳花苑といふ舞をはしめてとたまふと
見ぬなく御覧ぜしに　弄　右大臣うれしすとはじめ給ふべしら
御ざまり　細　頭中将の舞給ふと源の褒美し給ふ也
まして御ゆく末にはきちいでさせ給へとまうしたまふめん
ゆくみやびやかなるにこひ給ふ　細　おもしろきもゆゝしくまた
出ぬるとあらまほしく君にまさりてみのうちにおもはしく此宴い

て給ふへく桐壺の御代のあはれなるへきことをとや
弄　ましてたいらの藤の花宴に一院のわたり給ふ御遊の両日なり（ミホノ）
弁中将なとも参りあひてのちそ侍る也
にくき物の末とも花をみれは心にまかせても
ろし　弁　右大臣息也或本に中将弁とある也
細　左人也弟上此兄弟也　弄　頭中将兄弟也
此乃君の見えはまかれなどもまかせて
きこしめすとよしはやましきことかな　弄　朧月夜は源氏のあひ給ふ
とき也
春宮の御方はましうなといれもとわれなきに
うちわたりはいとしのびやかにて　細　古歌
朱の橋へきこそ也　弄　朧月夜の朱雀へまうでさせし

これはさる内侍共のこと也　宋　朱雀院へ朧月夜乃
まいり給はんこと也
あはれなりしハかなしかる事をしるもきこえて　宋　左大臣に
息女と云も源氏まへ給ふ也
おとにきゝしかはのおはしましつるをも人のいはるゝなるも
ひきつゝける給ひ　細　弘徽殿おほきさきのことを也　宋　源氏を
よしなしと右大臣におほしめさぬと也
やよひの廿日右乃大とのゝ弓のけちに上達部みこたち
おほくつとへ給ひて　弁　賭弓後宴也弓といふ事あ
又一部定まる事ゆへあし藤花の時分に宴あれ
ハめ式に成侍る也　細　此年右大臣の亭にて賭弓の後
宴ある也　私　賭弓後宴弓結也是ハ云をかなしと云の
結ハ右大将の亭にて小弓あそひありて結ま藤花

宴し給ふ也　見花宴　宋　禁中にてある賭弓乃後
宴と云れ結とハいへりそれを右大臣にまねひてせられた
る也　その藤花乃宴あるやうに賭負によりて也
やかて藤花のえんし給ふ花さかりはすきにたるを
花さかりやすきにたるを　細　右大臣にて藤花宴あり
又天暦三年四月十二日飛香舎藤花宴にて和哥
管絃あり　私　大やけことにおほしくへ給ふ也
ほかの散なんとやをしへられたりけんをくれてさく桜二本
そいとおもしろきあをしらうはへる度を
古き哥に外の散なん後そさかましやまめるは花
まひとつへ立る心なれも哥の詞まゝなるなりと
人の残りてかくうきる也　定家の哥ハおほく八代集語
より出たるを心ゑて作り給ふ詞そむかしに見る也

のうきて思ひをかなる日もなきしやとよめる人の本意なり
なくしるやいかなるへきをつきめたる心なれハやうそい
さむる筆ハ心をとゝめてよき紙を得るや花の相似(アヒニ)
あるやうなれともよろしきまなれと筆のつい
てまた御也大かた源氏なるを一見(イツケン)したるも花なるとも
よきまんをとめやよきまんなる事をみとも本意本説を用へき
様にもあらしともしておもふ事に倣ふハいと多かる也人への
ことめにもあるへしつきを得也　弄　我本意にもすてふると源氏さ
うましきをとしおもふ秋にて書たる詞也　細　時節(ニセツ)
かすかなる花の春も誹諧(ヒユセウ)　実　本意はわれ花さへん
源氏なれハしも花なとしへさかれハ春の花のをんもて
あてふてもかの花ちらんとやとしへられさるをさんやと也
かたるも　奇妙

引歌
見る人もなき山里の桜花ほかのちりなん後そさかまし
とやたちの清水さきの日みつさきになしたれさしうちなく
也物し給ひとのやうにつらねる事おもひとゝめてしかりけりて
あるし給へり　細　弘徽殿の御妹(ハウ)乃宮たちや源の姉妹也　河同
弄　右大臣家にてのことし也　花　朱雀院の兄弟也女宮たち
大将(ユウフ)にてのよしもなかりきなと　実　右大臣ハ
孫(ミヨ)也もとよりてめすへ物にや也惣別此事の事とも
のかくの心ありさまなるよいやうにいはくになとを見えたり
源氏乃君にも一日うちのかくはくへあんのはいくにやの
給ふかと　実　花宴の時禁中にて大臣は源氏へことに
の時藤宴の事物兼(ケン)侍ふや
あるをむへきちかし　細　源乃事也
物の心へあてしかきちかしての四位の少将とも給

河 花ぞの　同 栄
春やとおもひ花しきなるふるさとに見給ふも遊
細 むかしの事を思ひて我宮の花をめてゝ給ふ也
栄 中宮の御事也我宮の花をめてられし源氏なとをいつまちや
ましてそれとこれは一しほ花なれとといふなるべし
ほかの花に劣る様に給ひたるや
うらみおもへる事ほとにみてくらへにてもしる 栄 源氏の文
問にあらまほしきと也
しらまほしきやうをこゝにいはれし 并 中将の君にも
我宮の花をほめたるやうなる御心をこそ申し
また々や春をと人の心に思はれ給ふ故に更に人さらに
や春に心をかし源氏の事と宮御(コウ)(クワン)の心なるへし 細 わか
宮の花をほめたるやうなるとわかれしも給ひ也

栄
春はかはる也によつてつかひしを給ふ也
わさとあふみ紙にやうかせてよこし・栄 中宮の御消息なり
中宮よりもわさとはからひなれは也やしおおれとも
女みこたちなとをおもひやる事なれは我色そのやうふかきに
かまひきとなるとの給ふ 并 源氏のおもふ也女房たち
物をいふ事なれは我にてれさ候よしも源氏にこ
御給仕也中将は源とは申よしぬるたちなれとかゝる
にちかくはめ給ふ人也 細 源氏に見せたる也中宮へ
わたりてそれそれにてまつしき向はいそうなるへし
ことなし給ふも物越訓(ケウクン)也
はかなひおもひ給ふてむつかしきほとにまた
思ひそめられし給ふ 河 粧(ヨソホヒ) 只行粧(タヽギヤウサウ)なとの事也男女の装束(シヤウゾク)
也名ともいへり 栄 ほかによるとも源氏結構(ケツカウ)し給ふ也

桜かさねのことは表しろくうらひそめはなさくさね
花 栄華巻ニ云六条院ハ桜かさねのことはうすいろしとやう
ことはいろひさしくて表をもちなはおりものとくさ
いろいろあをとゐんかへるしここに六条院納縫に二所り
かるゝはらかくひろうをとうきをうかけれさいきのこと
紺かくも文ハここにいろとあし一色みてとおりたる物也
かし織物に二色におりて地のまとして唐綾衣楽とて又は
作るありそれハ下かさねうへの衣もとうしれさと
もちゆるや桜かさねのきさハおもてしろうこうしれさた
まそうかへしをつきるる物也 栄 花ひそめ花のうす
色あり
ちるはなといかくいひさて 花 ちるまハ裾や裾ハ衣のすそを
いふや西宮ニ云上ろうハ直衣のかしにハ下かさねとてます

随身はいみしうしたるものとここと 袍に下襲をとう
さぬるハ布袴と云上下用ふ事也直衣布袴依時依
人也帯ハ丸鞆也或皮帯とも云う時宜為着
縫腋太刀随ニ 弁 直衣に下かさねして裾と紀さ許也
細 みなんな袍を着也直衣布袴やいふ出立也 それ地のと
ハ浮かくをおりたる物也唐織物なり二色ありの
ちし桜のさも面しろさうしれさん蘇芳のうら
と付たる物也
みなんなさう色のさぬるに 栄 源のかハ山帯袍さしぬ
きと見えして裾と引ける見えハたたまれる役也
はされたるおほきをとうされなさえあくれさそうふ
河 鮮 論語 鮮 宿 日本紀 宿花 同 見ま字ハ前巻注之
此字中鮮字可宜見只左紀乃義見又宿花儀を見

其褐弁並衣布袴宿老人可予之由見中右記
源氏随身宿老依為之着之也
かほうしハ王の字や古と集てうきのかほうしとうねと
れかほうしとちるとあり　花　注　韋　此なにしるしをきるかほう
きこえるやありしてしへはされたるも志るしをきる
きんすやはしれちうにさしぬき給ふて　褶　とうたふれ
はしのうとや並衣ま褶をかゝるは志るしをきるにいたとも
いふへしけされたるはされ侮るやいふとて予悪とくハ内々人
しん是ハ王乃字や大人のもくるると云也や又並衣をかう
たと郎たるこもとくやと云說也　和　何されハあさやうや文
志くとくれもとうそや人ことをとうハたゝきをたくさん也と
弁
親王の姿れやうやと云すや又云並衣をうら紙いふ大人姿を
はめかある詞也　細　志るしをきる紀にうや　栄　源氏ハ並衣ま褶

とり給也　精愛を略ある紙めてしきをきるよせや
いかきいう給へる法さ夜をといとをとあり　河　寵　巌
いつきうしいくいえ
花乃句ひとをとされてあるく華清しにあんはそひる
やいとおもしろう給へく秘ちうし更行ほとに源氏の君
花の句ひとも　細　華子地也
いてう系ひるやかるき夜にもてなし給てまされたち給ぬ
ゑいちのやめて　そゝう　醉也
志ん殿ま女一宮女三宮のおハしまし　栄　かれまでも弘徽殿女
御の法もうる也女一宮ハ一条しておうてしかわかれまでそり
大内女三宮ハ葵まてに為母院いつきと源氏法連枝
あり　河同
むんうしれやくろちにありしてよるとゐおゝり　河　妻戸くちうた

はなとのみをひとつ縁へ花をはなれたる也
花ハこれらのはなにおとらすて はなさくみえしとおもふ
さしてんくいそみるなり 宋 ちらん夜のうくへかるとて花ハ
ともかくもなり

袖ちらちるとさそはれ行なりおほくてもと作しめきさまちく
いそうる紙 弁 踏歌(タウカ)此時の出しきぬるとのむかしとつくる
みえはるなとよみけんは詠也 一説云 袖口とハ簾(スダレ)の
もてこはなと詠うたれさぬの袖と出はるやとの世なり
とも大饗(キヤウ)ると時の節(セチ)式乃時もいろしきぬあり又くるま
よりも袖とも出はや 細 も見えうちくちるなる
にわたりにもとくしきかときぬ也

ゑさしくにもあり花はかわるなとおもひ出しける
不祥(スサマジカラ)日本紀 花 栄花物語ニ枇杷殿 后 妍子三条院ノ后 道長公女

又女房の袖口をいだしてくるまに出されたる紙也 小野宮ノ大臣
実資公ハ疑もなく見しあり今此物語ニ色ちきて
むかしの御代にとめハ行ける清水の袖口ともめかしさを
くるまにさされたる紙 源氏の花宴ハ右大臣かたの藤花の宴
遊ハちるよしさにもとくて花の袖は花の縁ちる物をと思
合縁也 弁 弥生の廿日あまりハ桜の花とかてハ藤のさかり也
かゝる折也とて見くるは藤かうちつれ出しかけたる也
宋 可然をもちなる花枝也

あやまちはいとくちし光君られて 細 源乃詞也
わかみなくいふ 河 見ひかえるやみくつさしある詞也
うらこれとこれおもへはそハかえり花をしたる
はなとのみそて行人ハ 河 伊勢物語 咲花の下にかくるゝ人
おほくありしにまさる藤のかけかも 業平

花 伊勢物語の哥にも此下にかくるゝハ業平中将の兄行平中
納言のもとにてかめにさしたる藤の花を詠(ヨメ)るとて
時の忠仁公(チウジンコウ)良房(ヨシフサ)の藤氏(トウジ)の人々を思ひよそへてよめるとし
桐も見てもさらぬ故(カルガユヘ)によりて二条の后をかくしと忠仁公によそへ
てうきにてかくれさきを行平ハめてたく源氏の君此の後
藤の花よりまさりたる陰也 細 花宴説面白し 但右大臣ハ姫
宮たちをとりかこうる儀可然歟云々
あるしつゝしかるぬ人へそやむことゝなる紀ゆかりまてハちからち
給ふなれとれ女もしきと見る給よおもしろくしつへおかしねとて
急てのかしこまりをとりあはせていはれてはさもしきを見ては
給し 細 此ほとかゝる女房ものいふやさしさものこの
類(ルイ)もとめいはれとや 河 不平(ヨクモアラテ) 白氏文集 源氏云みえけとかき
ことめんとてみなをひきて行くハうくいふやもむとおとゝ

ゆかりまてハ源氏のゆかりとれ宮たちおはしまさぬ也
孟 そこの女房なとそ云様やらやしきへ入るとてゆかりたに
寄(キシ)人へ入るとおもれともまとひめるまのちれとひなつる也 女一女
三の宮おはしますゆへにかくいふ源氏の心を朧月夜
となん定めむかしの紀也
空薫物いとけふたうくゆりてきぬのおとないいと花
やかにふるまひて心にくくおくまりたるけはひハた
ちをくれいまめかしきことをこのみたるわたりなれハやむことなき御
きはかた〳〵物見給ふとて 細 此家の者様とかくあらまほしきた
そのほとにもちかくなりぬとおもひさとく出たるを見るも心にくき
皆(カイ)人の用意とかめたるや 孟 いかれもほめぬはくきやさしき
きるとハかやうのほかの心にくきすとせるさまを
のとかにもあらぬとゆかしきさまと云り常(ヨ)夜

の気色もなく也

これ君たちハ心め給ふるなるへし 細 宮たちハおかし給ふ也
ゆゝしきもあるましきことなれとさすかにうちおかれ
されてかり出ちらんとむさとうちつかれて 細 此朧月夜の
也 孤 源の心にもみまし給ふすとハ思給ふなるへし
宋 此是桜の女宮たちハ給ふしものをてもとかくさぬ
色のあるましきことかしや

扇をとられてからきめをみる心うちあはれとをしめてえぬ
ひとりしてよみ給ひ 河 催馬楽 石川 石川の高麗人と
まおひとりとりてからくねたるる 東野文 花 源氏の
君扇の女しとたくらんさかめれなるまことに石川の
うとに帯ひをとりてからきめをみるといふ心なと扇
をとらへ給ふかひなくなるひる扇のぬしハやそてん給はさる也

弄 石川催馬楽の詞をもてとりなしたまひ給へり 一勘 石川
如文氏名所也 細 催馬楽石川高麗人にかえれまう
とに帯をとられてからきめをみるといふ扇をとられてからき目を
きこゆる人かはりたらんと思給ふ也

あやしうもさまかはりたるこまうとかなといへるハ
しらぬさまやあらん 花 いふまれとも気しらぬ人ハさうちすて源
氏の君の心ひけやまし給ひつるをねたりし君をみくさ
はへたるこまうとかなとあめるなるへし 細 かく云
ハ一向に此扇のぬしとも知らぬ人なるへし

いらへハせてたゝ時々うちなけきたるけはひする方によりて
かゝりて木丁こしにて手をとらへて 花 扇をとられる
人をとや又初くうちなけくきさのひかりにいらく
れさるや源氏の君ハ心ひきましたる也と思給へく

人のこゝろ涼しきとみてかなしとよそへる詠也　細　此人々なるらん
しと推量し給也　宋　朧月夜のさま也
あつきなつのさかり山よりとみれは月のかけもうつるみゆる時
花　言はきちの日なれはありさまの給さ此山とさうはの
かくし月をも此乃我の心をとつる戸口をとめてしまる
心也　細　此日ははかなるれは悲縁ありし日の戸口と
云也　宋　源氏の詠をこの文口のこく勝月夜にあひ給
しるをとひにてくはさ此山にまとふとは云ふと所今
はりたん人を案しせさせとの也
あふゆへをとしあへてにの給と　細　行ゆへにまとふる心也
花　見ゆへとも思ひもしなれはとしあへてと云也
宋　名やうに夕さ此山のさとふも云此ゆへるとれ心也乃性
ありしなれとまとふへ給へとも云しりに給ふの八

もつともやうにとしあへての給也
えさのおゆかたなるへし　細　けしきは源氏の御気色給と勝月
夜のことくえ思ひ給ふなる也　宋　朧月夜乃心ならり
心なるかたをまつしもをもはかなきと此月なれにさよは御心
花　あるそやうひの大将月なれともやうくちりなる月にある
まろやまよふとうつす心にもぬゆへにそあれと源
細　氏乃言は中の文字まうくるとく指すなるへし
深く心にいる事なくは弱まとは給しかしとや前の
言はたとふるれよりうまきたる返言也　朧月夜は天性になよ
ことも　宋　朧月夜乃返言也心を源氏乃真実に相得し
めさも月なれ云やとをまよひ給つしとやたく大方
さに心のかくぬよまてさやうかくの給るとも
せらかく思ひたまされあるかとられしさまのかる

花草ぬる人ハまことしとやさずと思ひしそれ人のこゝろを
見らめとおもふ様しき物かたり結詞の詞おもしろ
くはれなきかたり見しくハあれども心まさ去
の見とハおもしろにまうぬ心をつくまもつ 弁 為何
ひらくハられしかれども女の見るすまへさるすれ詞をまも
さるへきことも結心何まハ物かたりをなんひのうちら
見文源氏の躰也おもる説を見るおもるや又六乃居
殊に不明なし此外又心あるといつれも面白見此何のさ候
うましかれども我おちをさゝすく物をまるへき心をこめ
て物かたるやうやなき有感ぞや 細 おもし朧月夜
の巻也花宴説面白し但師説此結詞ハ返ゑをとし
猶よすハう見つくハあれども女の方にとるまてハうと
うるくしくおほしるや見源氏見ぬ躰也いりくまを

此んありし此物語の中にも此巻をとくれぬるか也
俊成卿ハ六百番歌合の判にも紫式部ハ歌よみより此ほと
よりも物かく筆ハ殊勝の上花宴巻ハことにえんな
る物也とさ 栄 源氏の見ぬ人と歌詠を見かくし為を
とも去あうしそれ人の心をも見ん物とし雅とも見も
ハ女なとにも見るあまるをまうちのきにお遮せぬ心とあり
花るるの心をお遮まや 玖 弁同